

梅原猛氏は、日本を代表する哲学者の一人です。この本は、哲学について語るのではなく、氏の経験を率直に述べている点で親しみやすい書です。42話からなり、自身の病歴や相撲界でのいじめ、数字で見る野球、一昔前に大騒ぎした米不足などを独自の視点でわかりやすく書いています。

中でも興味深かったのは、古い話ですが、ビートたけしが交通事故で入院したとき、当時のマスコミは、テレビ番組でたけしの穴埋めを出来る人物がいなかったことから、たけしを日本一の偉大な人間だろうと賞賛しました。それに対し、本書では、例の目をパチクリしたり、肩を揺すったりするしぐさは親に甘えたりない子供がする所作と分析しています。これが哲学的考察なのだと思います。

同じく小沢一郎。闇の帝王として、長い間続いた自民党の単独支配を終わらせ、連立内閣の時代を作った手腕から革命的政治家と見る一方で、成熟した人格に必要な情緒やゆとりがないと斬っています。二世議員の子供らしさを指しているのでしょうか。同郷の宮沢賢治の思想を理解しなければ、田中角栄や金丸信の二の舞になるとも。金権政治のことでしょうか、現在の小沢氏を見ると、梅原氏の眼力の鋭さを感じます。

もう一つ。貴乃花といじめでは当時の相撲界のいじめに触れています。いじめがあるから、強く見返してやろうと強くなる努力をしますが、貴乃花は父親である親方の庇護があつて、強いだけで一人前の大人になる機会がなかったと書いています。貴乃花が宮沢りえに恋し、やがて愛情が持てなくなったと別れたいきさつからして分かるような気がしません。数例を紹介しましたが、梅原氏の物事を大人の尺度から複眼的に考える見方を、このエッセー集から読みとりました。

F M
文芸春秋

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞